

わたしたちが生活していく上で、地球の温暖化と生態系の危機が大きな問題となっております。温暖化すると地球の水が溶けて海水面上昇し、低地が水没して多くの人々の暮らしに影響が生じます。また、暖かい所を好む動植物が北方へ進出するので、各地の生態系に変化が生じます。これに資源の乱獲が拍車をかけた結果、多くの生物が絶滅しつつあります。

生態系の危機が深く関わって来ました。縄文時代の前の旧石器時代は、氷河期に相当します。その平均気温は今より7〜8度低く、たとえて言うならば、南国鹿児島気候が北国青森のような状況だったようです。

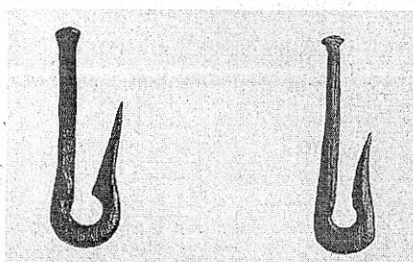
植物の種類も今とは大きく異なり、滋賀県周辺でもシベリアのようにモミなどが疎らに生える針葉樹林が広がっていました。この林には寒いところを好むヘラジカ・オオツノジカ・ハナイズミモリウシといった大型の獣が暮らし、旧石器時代の人々はこれらの獣を追い求め、主食にしていたのです。

ところがこの大型獣は、今から1万数千年前を境として絶滅してしまいました。その

環境と動植物相の変化



大津市の粟津湖底遺跡の第3貝塚



米原市の入江内湖遺跡から出土した縄文時代の骨角製釣針

は、釣針や魚網の錘、丸木舟が見つかっています。人々の危機を救った「新たな資源」とは広葉樹の森です。この森

でした。新たな工夫の一つは水産資源の利用です。人々は陸に住む大型獣から、水辺に着目しました。釣針や漁網を発明し、魚や貝を主食に取り込んだのです。その結果、日本各地に多くの貝塚が生まれ、琵琶湖でも世界最大級の淡水貝塚―大津市粟津湖底遺跡が形成されました。また、米原市入江内湖遺跡から

原因としては、乱獲と地球の温暖化が考えられています。旧石器時代の人々は、主要な食料資源を失う憂き目にあったのです。

この危機を救ったのは、「新たな工夫」と「新たな資源」

1万数千年前、温暖化と資源の乱獲が、人々を危機に陥れましたが、この時は知恵と工夫、そして環境を壊さなかつたからこそ、救われたと見るべきでしょう。わたしたちは、この歴史からどんなヒントを見つけられるでしょうか。

絶滅危機救った知恵と工夫

さて、1万数千年前の縄文時代の幕開けも、温暖化と生

(財団法人滋賀県文化財保護協会 瀬口眞司)